

バスケットボール競技における オフェンスリバウンドの奪取数の向上に関する研究 -オフェンスリバウンド上位選手の特徴に着目して-

スポーツ科学研究領域

5023A037-7 祖父江 卓人

研究指導教員: 倉石 平 教授

I. 諸言

一定時間内のゴール成立による得点の取り合いによって勝敗を決めるバスケットボール¹²⁾¹³⁾において、得点機会を増やすということは非常に重要なこと⁶⁾¹¹⁾³⁴⁾だと考えられる。そのなかでボールの所有回数を増やし、攻撃にそのままつなげることができる¹⁴⁾¹⁸⁾¹⁹⁾オフェンスリバウンド時におけるボールの奪取数の向上ということは全てのチームに求められていることだと感じた。リバウンドに関する先行研究においては高身長選手がリバウンドに関して是有利とされている¹⁾²⁾²⁷⁾²⁹⁾³¹⁾³⁵⁾³⁶⁾。しかしながら、高身長ではない選手でもオフェンスリバウンド奪取数が多い選手も存在する。そのような選手も含めたオフェンスリバウンドの上位選手のリバウンドにはどのような特徴があり、その特徴を本研究において体系化することによって、オフェンスリバウンドの奪取数の向上方法について明らかにしていくため、オフェンスリバウンド奪取時に注視して現状分析を行うことを目的とする。

II. 方法

1. 分析対象

2023 年の第 99 回関東大学バスケットボールリーグ戦(以下「リーグ戦」とする)における 1 部全 133 試合を対象とし、そのなかで関東大学バスケットボール連盟の HP に掲載¹⁰⁾されているオフェンスリバウンドランキング上位 30 名のオフェンスリバウンド奪取時の全シーンを対象として分析を行った。

2. 分析項目

1) オフェンスリバウンドの定義

本研究では攻撃側が獲得したリバウンドをオ

フェンスリバウンドと定義し、2 人以上が関わるオフェンスリバウンドについては研究対象より除外した。

2) オフェンスリバウンド獲得位置

①ペイント(制限区域)、②ペリメター(3 ポイントラインの内側のペイントエリア以外の区域) この 2 箇所をオフェンスリバウンド獲得位置の項目とした。

3) リバウンドの際のオフェンスとディフェンスの位置関係

オフェンスリバウンド奪取の際にディフェンスがオフェンスの前にいる場合、ディフェンスがオフェンスの横にいる場合、ディフェンスがオフェンスの後ろにいる場合、オフェンスが飛び込みリバウンドを行う場合の 4 つに位置関係を分類した。

なお、ディフェンスがオフェンスの横にいる場合に関しては左右の違いは問わず、いずれの位置にいたとしても横と定義した。

4) コンタクトの有無

リバウンドの際のコンタクトの有無について、コート内のいかなるリバウンドのシーンであっても、フロア上での身体を使ったポジション取りが確認された場合にはコンタクト有り、確認されなかった場合にはコンタクト無しとする。

3. 分析方法

各項目をタギングし、エクセルに集計した。そして、オフェンスリバウンド奪取位置に関してはコートの縮図にそれぞれプロットした。また、プロットに関しては、バスケットボール競技の経験が 10 年以上の計 4 人で作業を行なった。

4. 統計処理

各項目と諸条件についてカイ二乗検定を行い有意な関連がみられたため、下位検定として残差分析を行った。また、統計処理には IBM SPSS Statistics 29 を用い、有意水準は 5%未満とした。

Ⅲ. 結果・考察

1. オフェンスリバウンド奪取位置と回数

1) ペイント

ペイントにおいて、最もオフェンスリバウンド奪取回数が多かった項目は、ディフェンスがオフェンスの前にいる状態でコンタクトが確認された場合であった。要因として、シュート落下地点がペイントに集中することから、ディフェンスもペイントを厚く守ろうとするために相手プレイヤーとゴールの間にポジショニングして背中で相手の体にコンタクト(接触)する「ボックスアウト」が多く発生したためだと考えられる。また、これに関してカイ二乗検定を行い有意な関連が確認されたものに関して、下位検定として残差分析を行なったところ、ディフェンスがオフェンスの前にいる状態でコンタクトが確認された場合をはじめとする 3 つにおいて有意に多い傾向が見られた。倉石(2016)が「ペイントエリアにおいてはリバウンドボールが落下する可能性が高く、ゴール近辺の場所をどれだけ占有できたかが、リバウンド奪取数に大きく影響する」と述べているように、ペイントはリバウンドボール奪取の為に重要なエリアである。そのペイントをめぐる発生したコンタクトに対して有意に多くなる結果となったと考える。

2) ペリメター

ペリメターにおいて、最もオフェンスリバウンド奪取回数が多かった項目は、ディフェンスがオフェンスの前にいる状態でコンタクトが確認され無かった場合であった。要因として、ペリメターは落下してくる際に弾かれたボールやゴール下エリアのポジション争いを越えるロングリバウンドを奪取しやすいエリア

11)18)31)とされており、比較的低身長プレイヤーでも接触を伴わずに奪取することができるリバウンドの種類が多く発生した³⁴⁾ 為だと考えられる。また、検定を行なったところディフェンスがオフェンスの前にいる状態でコンタクトが確認され無かった場合が有意に多くなった。この要因としては、ペリメターに落下してくるリバウンドボールはロングリバウンド³⁴⁾³⁵⁾が多い傾向にあることから、ディフェンスがボックスアウトを行っていない状況下におけるリバウンドシーンが多く発生していたために、コンタクトが確認されない状態のリバウンドが多くなり、その結果に対して有意な関連が認められたと考えられる。

2. リバウンド奪取位置と身長の関係性について

本研究においてペイント及びペリメターにおけるオフェンスリバウンド奪取者の身長について見ると、ペイントではペリメターと比較して長身選手がリバウンドを奪取しているということが分かった。これについては、JBA(2019)が「身長が高いことがリバウンド獲得のために有利」と述べており、八板(2017)は「ペイントエリアにおけるプレイが多い長身プレイヤーはリバウンド獲得をする機会が多くなる」と述べているように、本研究においても先行研究同様の結果が得られた。また、ペリメターにおいては比較的身長が小さい選手でもリバウンドを奪取しやすいと考えられる。

Ⅳ. 結論

オフェンスリバウンドの奪取のためには、ペイントでは「相手とのコンタクトのなかで、リバウンドボールへ向かうこと」、ペリメターでは「ロングリバウンドをよく観察し、落下地点にいち早く入ること」が推察された。また、ペイントにおいては比較的身長が高いプレイヤーが有利となり、ペリメターにおいては身長が低いプレイヤーであってもオフェンスリバウンドを奪取できる可能性が高まるのではないかと考えられる。